
名探偵コナン・幻惑の3怪盗(トライシーフ)

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

名探偵コナン・幻惑の3怪盗^{トライシーフ}

【Nコード】

N1642M

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

『FBIから来た女』シリーズ、スペシャル版第15弾。7つの宝石を巡り、探偵達と怪盗達の頭脳戦が繰り広げられる！！

ブログ：快斗達の提案

黒羽家

黒羽快斗は、新聞を読みながらトーストをかじっていた。

黒羽快斗

「平和だなあ・・・こう平和だと、体が鈍るぜ・・・」

黒羽弥生

「だよねえ、お兄ちゃん。」

遠蘭鈴

「遊園地にでも遊びに行く?」

弥生

「トロピカルランドもマリンランドも、ほとんど遊んで飽きちゃったよ。」

鈴

「そっいえば、隠し部屋からこんな物が見つかったよ。」

鈴は快斗に物を手渡す。

快斗

「これは・・・地図じゃねえか?」

黒羽盗一

「懐かしいな、それは父さん達が若い頃に見つけた、7つの宝石の

在処を示した地図だよ。」

鈴

「宝の地図ですか？」

盗華

「ええ・・・当時は必死になって探したもののよ。結局見つかったのは1つだけで、すぐに元あった場所に返しちゃったけどね。」

快斗

「ヘエ・・・あ、そうだ閃いた！」

弥生

「何がよ、お兄ちゃん？」

快斗

「この地図を元に、知り合い達に宝探しゲームを持ちかけるんだよ！」

鈴

「宝探しゲーム？」

快斗

「ああ・・・父さんや姉ちゃんが見つけれなかった宝石だ、きっとすごい秘密があるんだ！それを暴く目的もあるし、純粋に宝探しを楽しみたいって気持ちもある！」

弥生

「面白そう！やるやる！」

鈴

「2人がそう言うなら、やりましょうか・・・」

工藤邸

数日後、工藤邸に快斗達からの手紙が届いた。

コナン

「お、快斗から手紙だ。って、これは何かの挑戦状か？」

哀

「どれ？私にも見せて。」

コナンは哀や、遊びに来ていた刃・ユリの前で手紙の中身を広げる。

そこには、快斗達からの挑戦状が記されていた。

『久しぶりだな、名探偵達。

今回手紙を送ったのは、オマエ達と2週間ゲームをしたいと思ったからだ。

同封した地図には、7つの宝石の場所が記されてる。

その宝石を巡って、ゲームをしようじゃないか。

2週間後、7つの宝石をより多く集めた方が勝ちだ。

そっちは何人できても構わない。

負けた方は、勝った方の言う事を1日何でも聞くって事で。
楽しい勝負にしようじゃないか。

黒羽快斗・黒羽弥生・遠蘭鈴

コナン

「宝探しゲームねえ・・・」

哀

「蘭さんまで絡んでるなんて・・・」

刃

「面白いやないか。蘭ちゃんには前に見事にやられた事あるからな、そのリベンジや！」

コナン

「何人できてても構わないって事は、歩美ちゃん達にも協力してもらって良いってワケか。」

哀

「みたいね。面白そうじゃない。」

ユリ

「そうね・・・？」

ユリは窓の外から、何かの気配を感じた。

急いで外に出る。

バツ！

ユリ

「誰！？」

ユリは辺りを見回したが、誰もいなかった。

コナン

「どうした、ユリちゃん？」

ユリ

「イヤ・・・さっきまで誰かがこの家を覗いていたような気がしたんだけど・・・」

哀

「気のせいじゃない？」

ユリ

「・・・そうね・・・」

だがこの時コナン達は気づいていなかった。

この宝探しゲームが、恐ろしい事件に発展する事を・・・

序章：名探偵コナン・メインテーマ（幻惑バージョン）

名探偵コナン『幻惑の3怪盗』トライシーフ

アタシの名前はリアン・ハートネス、FBIの女捜査官や。

アタシは黒の組織で潜入捜査をしてたんやけど、ジンにバレてしもたんや。

・ジンに捕まったアタシは、APTX4869を飲まされてしまい・

体が縮んでもたんや。

アタシが生きてるとわかったら、また命を狙われる・・・

幼なじみの服部平次に助けられたアタシは、剣野刃と名乗った。

それからアタシは寝屋川小学校を経て、帝丹小学校に通う事になり・

・
・
そこで、アタシと同じように幼児化した工藤新一君・宮野志保ちゃんに出会ったんや。

ほなここで、アタシの頼もしい仲間達を紹介するで。

まずは、工藤新一君と宮野志保ちゃん。

志保ちゃんは、元々黒の組織の科学者で、A P T X 4 8 6 9を開発した張本人やったんや。

そやけどジンによつて明美さんを殺されてしまい、A P T Xを自ら飲み組織を裏切った。

今は新一君の恋人で、頼れる相棒なんやで。

ちなみに明美さんは、結局生き返ったんやけどな・・・

少年探偵団の初期メンバー・吉田歩美ちゃん、円谷光彦君、小嶋元太君。

数々の場数を踏んどる、心強い仲間達や。

特に歩美ちゃんは、黒の組織メンバーの妹やったみたいや。

道理でな・・・

東尾マリアちゃんも、テキーラの愛娘や。

坂本たくま君とのコンビネーションは最強やで！

組織を裏切ったもう3人、如月風月ちゃん・常盤暁君・金田一ユリ。

3人共とても強い！

ユリはアタシの大親友なんや！

他にもたくさん仲間があるし、ジン達も味方になってくれて・・・
FBIやみんなの協力もあって、ようやく全ての元凶・ペンデュラムアッドは壊滅した。

そんな中、怪盗キッド達から宝探しゲームの挑戦状が届いたんや。

気になるんは、ユリが感じた気配・・・

また何か、よくない事が起こりそうやな・・・

小さくなっても、頭脳は同じ！

迷宮なしの女FBI！！

真実は、いつも1つ！！！！

第1章・1：中森兄妹からの呼び出し

ある日コナン達は、警視庁に来ていた。

コナン

「目暮警部・・・ボク達何か悪い事しましたっけ？」

目暮十三

「とんでもない！君達はむしろ表彰を受ける立場だよ！」

哀

「表彰・・・ですか？」

白鳥任三郎

「当然じゃないか。警察もお手上げたった、警官連続殺人事件を解決に導いたんだからね！」

これについては、名探偵コナン『忘却の狂戦者』バーサーカーを参照して下さい。

十三

「ただ、今回君達を呼んだのはワシらじゃなくてだね・・・」

「目暮！コナン君達は呼んでくれたか？」

コナン

「その声は・・・」

哀

「中森警部!!」

中森銀三『警視庁捜査2課警部』

「おお、コナン君達じゃないか!来てくれたか。」

コナン

「中森警部・・・どうしてボクらを呼んだの?」

中森銀河

「あなた達の所にも来たんでしょ?快斗君からの挑戦状が・・・」

哀

「あなた達って事は、中森警部達も?」

銀三

「ああ、快斗君達から挑戦状をもらったよ。まあ今回は本気で快斗君達を逮捕しようなんて気はない。ただ彼らとの腕試しが楽しみなだけだよ。」

銀河

「さ、着いたわ。ここが捜査2課よ。」

コナン達は2課の部屋に入る。

すると、見知った人物が3人いた。

コナン

「ユーリさん、ジョディさん!」

哀

「リラさんまで！どうしてここに？」

ユリ

「中森警部達に呼ばれたんだよ。」

ジヨディ

「『ある盗賊団』についての情報を話すためにね。」

コナン・哀

「ある盗賊団？」

リラ

「中森警部、まだ話してないんですか？」

銀三

「ああ・・・」

銀河

「後もう2人も来てから話した方が良いと思ってね。」

コンコン！

銀河

「あ、来たわ。」

ガチャ！

銀三

「風蘭君、凧君、よく来てくれた！」

銀河

「じゃあ、そろそろ話そうかしら。その盗賊団についての話を・・・」

銀三

「快斗君達が我々に挑戦状を送った事については話したね？実はその宝石の在処を示した地図のコピーが昨日、杯戸美術館の倉庫から盗まれたんだ・・・」

コナン

「ぬ、盗まれた！？」

哀

「一体誰に・・・？」

銀河

「手掛かりとして残されていたのは、この1枚の紙・・・ここに書かれてある物を見て。」

コナン

「これは・・・北斗七星？」

銀三

「そう・・・これは5年前に壊滅した盗賊団『虹の北斗七星』のシンボルマークなんだよ！！」

コナン・哀

「虹の・・・北斗七星・・・」

第1章・2：盗賊団『虹の北斗七星』

コナン

「虹の・・・北斗七星？」

哀

「その名前なら、組織にいた頃聞いた事があるわ。世界中の美術品を荒らし回る、盗賊団だと・・・」

コナン

「だけど父さんが言ってたぞ？その盗賊団は、5年前に壊滅したって・・・」

刃

「そやで。虹の北斗七星は5年前に壊滅したんや。ウチらFBIの手によってな！」

コナン

「刃ちゃん達FBIに・・・」

哀

「どういつ事？」

刃

「5年前、ヤツらは例の7つの宝石を探してたんや。ちょうどその頃、宝石のレプリカが展示される展覧会があつて、ヤツらは宝石を手に入れるためにある手段を使つた。」

コナン

「その手段って?」

刃

「誘拐して人質に取ったんや。ユーリ兄とジョディさんをな。」

コナン

「ユーリさんとジョディさんを?」

哀

「いくら何でも無謀すぎない?」

刃

「普通はそうや。そやけどその時、2人は2人っきりで旅行してたんや。」

コナン

「旅行?」

刃

「たまにやるねん、2人だけでの旅行をな。リラちゃんもアタシらが預かってたし、当然ボディーガードもつけとらん。2人は楽しさのあまり油断しとったんや。」

ユリ

「なるほどね。それならユーリさん達が捕まったのも理解できるわ。」

マリア

「要するに浮かれすぎやったワケやな。」

ユーリ

「う．．．」

ジヨディ

「痛いトコつくわね、マリアちゃんは．．．」

暁

「それで、どうなったんです？」

ユーリ

「オレとジヨディは監禁され、ヤツらは引き換えに7つの宝石を渡せと言ってきたんだ。」

ジヨディ

「それで、私達の娘リラが持つて行く事になったのよ。ただし、レプリカをね。」

第1章 - 3 : 盗賊団壊滅の真相

コナン

「レプリカを？本物じゃなくて？」

ユーリ

「ああ。その宝石は当時、オレ達FBIでも見つけられなかった物だからな。そんな物が普通の美術館にあるワケないだろ？」

たくま

「そりゃそうだ・・・」

5年前

リラ

「持って来ましたよ、宝石を。さあ、パパ達を放してください！」

「ユーリ達はあそこにいる。」

男が指差した方向には、拘束されたユーリとジョディがいた。

リラ

「パパ、ママ！」

「だが、まずは宝石が先だ。」

リーダー格らしき男が、リラに近づく。

「これが7つの宝石か・・・ん？天井にかざしたが何も起こらんぞ？」

リラ

「当たり前でしょ？それはレプリカなんですから。」

「レ、レプリカ！？小娘キサマ、騙しやがったな！！！」

リラ

「騙すも何も・・・FBIですら見つけれない宝石が普通の美術館にあるワケないじゃないですか。」

「この小娘・・・者共、小娘を捕らえろ！！！」

リーダー格の男は叫んだが、何も起きない。

「なぜだ・・・どうして誰も出て来ない！？！」

「あなた、我々がやすやすと取引に応じるとでも思ったのかしら？」

「その声は！？！」

リーダー格の男が周りを見回すと、FBIの面々が周りを囲んでいた。

ドン！！！！

「なっ・・・」

砥草根風蘭

「取引場所をバカ正直に教えたのが仇となったわね？アタシ達はその情報を元に、張り込んでたってワケよ。」

向日木風

「あなた達の悪運もこれまでよ！！」

「バカが、ここにこの小娘がいる事を忘れたか！？この小娘さえ人質に取れば・・・」

ヒュン！

「き、消え・・・！？」

リラ

「ハアッ！！」

ドゴォ！！

「ガハッ・・・」

リラの空中からのかかと落としが急所に当たり、リーダー格の男は倒れた。

風

「その娘を甘く見すぎ。最強のFBI夫婦の間に生まれた娘よ？そ

の子。
」

風蘭

「若干歳にして戦闘の申し子・・・相手が悪かったわね。」

こうして虹の北斗七星の構成員はリーダーを含めて全員逮捕され、
最凶最悪と恐れられた盗賊団は壊滅したのだった。

第1章 - 4 : 盗賊団ボスの姉

ユーリ

「こうして、虹の北斗七星は壊滅したんだ。」

光彦

「でもおかしく不是吗？美術館から地図のコピーを盗み出したのも虹の北斗七星なんですよ？壊滅したハズなのに、なぜその名前が？」

風月

「考えられる事はただ1つ・・・脱獄よ。」

歩美

「脱獄・・・」

ジョディ

「そう、虹の北斗七星のボスには、姉がいたのよ。その名は、ポラ・リイズ。」

リアン

「しかもその女は用意周到なヤツでな。あらかじめ刑務所に仲間を潜入させとったんや。」

ユーリ

「おかげでメンバー全員に脱獄されちゃった。今はどこにいるかわからねえよ。」

コナン

「ところで白馬さんは今回中森警部側についてるんですか？」

銀三

「そうだよ。青子は快斗君側だね。」

銀河

「恋人の立場をわかりたいんじゃないかしら。その内怪盗になるなんて言われるかもよ？」

銀三

「それはさすがに困るなあ・・・」

コナン達は、みんな笑っていた。

同時刻・某国某所

ある場所の地下室に、虹の北斗七星の幹部達が集まっていた。

コカヴ・リイズ

『盗賊団『虹の北斗七星』リーダー』

「ポーラ、助かったよ。まさかオマエが来てくれるとはな。」

ポーラ・リイズ

『コカヴの姉』

「カワイイ弟のためなら、何だってできるわよ。それに、新しい子も何人か雇ったしね。」

コカヴ

「フッフ、我が姉ながら頼もしい・・・それで、ターゲットの目星はついたのか？」

ポーラ

「ええ・・・まずは黒羽快斗の幼なじみ・中森青子と、彼に協力していた小泉紅子・・・この2人を誘拐する。そして、黒羽快斗と中森銀三を脅迫するのよ。」

コカヴ

「わかった。オマエ達、すぐに準備に取りかかれ!!」

「了解しました!!」

盗賊団の魔の手は、刻一刻と迫っていた・・・

第1章・5：ポーラ・リイズの秘密

コナン

「でもおかしくないですか？5年前にユーリさん達が対峙した『虹の北斗七星』のメンバーは知っていてもおかしくないけど・・・なぜボスの姉の事をユーリさん達が知ってるんですか？」

ジョディ

「知ってて当然なのよ。なぜなら彼女は・・・元FBI捜査官なんだから・・・」

コナン

「なっ・・・」

哀

「何ですって!？」

ユーリ

「しかも実力は最強クラス・・・8年前の第1次組織大戦の時、たった1人で数1000のペンデュラム構成員を葬った・・・ついたコードネームは『怒号の女神』。」

コナン

「でもどうしてそんな人が姿を消したんですか？」

ジョディ

「そう・・・炎香や剣也と同じ時期に、終戦後いつの間にか姿を消していたのよ。その後彼女の部屋から置き手紙が見つかったね。置き手紙には『自分はやりたい事がある。ここではそれができないか

ら去る』と書かれていたわ。それからしばらくして彼女から連絡が来たのよ。『今は宝石商をやって生計を立ててる』ってね。」

哀

「じゃあ、その頃から・・・」

マリア

「『虹の北斗七星』と連んどったかもしれへんな・・・」

暁

「だろうな。虹の北斗七星が世界を騒がせ始めたのも8年前からだ
と、義母^{かあ}さんも言ってたし。」

ジョディ

「私達は虹の北斗七星の捜査を続けるわ。」

ユーリ

「オマエ達は、宝石探しに励んでくれ。」

リラ

「くれぐれも気をつけて下さいね。」

コナン

「ええ・・・」

哀

「わかってます。」

コナン達は、力強く返事した。

だがこの時、既に『虹の北斗七星』の構成員がコナン達を見張っている事に彼らは気づけなかった・・・

第2章・1：虹の北斗七星・7人の幹部格

ユーリ達はリリーが借りているアパートで、情報の整理をしていた。

ユーリ

「風蘭、虹の北斗七星の上位メンバーのデータは用意できたか？」

風蘭

「当然。ボスであるコカヴとその姉ポーラを除けば、幹部格のメンバーはこの7人！」

風蘭はメンバーの写真を机に並べた。

バラッ！

風蘭

「右から・・・フェイ・ダーク。ミィ・ルーザ。アンリ・オットー。ベネッツ・ナツシュボーン。メイ・ラクレス。ベン・ドゥーズ。メグ・レーズン。この7人が幹部よ。」

ジョディ

「そしてこの7人それぞれの下に、下級メンバーが何人かいるわね。」

「

風

「ユーリさん、私達やディティクティブマスター達だけでは不利だわ。ここはジンにも協力を頼みましょう。」

ユーリ

「それもそうだな。ジンには蘭ちゃんがいる。それに娘とその彼氏もディティクティブマスターだからな。よし、今から連絡しておこう。」

某所

ジン
「・・・ああ、わかった。」

ガチン！

蘭
「電話、誰から？」

ジン
「ユーリからだ。虹の北斗七星とかいう盗賊団の討伐にあたって、力が借りたいらしい。」

蘭
「チエツ、せっかくジンとイチヤイチャしたかったのに。」

ジン
「毎晩やってるだろうが・・・」

蘭
「クスッ、それもそうね。」

蘭はクスクスと笑った。

この2人、普段からどれだけバカップルなのだろうか・・・

某所・虹の北斗七星のアジト

ポーラ

「ベン・ドゥーズ。中森青子と小泉紅子の誘拐はあなたの部下に任せるわ。」

ベン・ドゥーズ

『虹の北斗七星・第4格』

「ハッ、ありがたき幸せ。必ずや、2人を捕らえて参ります・・・」

ベン・ドゥーズの部下の魔の手が、中森青子と小泉紅子に迫ろうと
していた・・・

第2章・2：幹部格達の休息

『虹の北斗七星』第4格であるベン・ドゥーズと部下達が出発していった後、他の幹部格達は広間に集まっていた。

メグ・レーズン

『虹の北斗七星・第5格』

「ベンは出発したのね。」

ベネッツ・ナツシュボーン

『虹の北斗七星・第2格』

「そのようじゃな。アルのガキ共に、ワシのカワイイ部下達を早く披露したいものじゃ。」

メイ・ラクレス

『虹の北斗七星・第3格』

「アルの者達を甘く見るな。邪悪のジュエルが倒された事を忘れたか？」

ベネッツ

「あれは所詮愚かな者達の魂の寄せ集めにしか過ぎぬ。ワシの軍なら楽勝じゃわい。」

ミイ・ルーザ

『虹の北斗七星・第1格』

「ボス、用事があつたら言つてよ。それまで寝てるから。」

ミイは自分の部屋へと向かった。

フェイ・ダーク

『虹の北斗七星・第6格』

「ベンだけなんてつまらん。オレはオレで好きにやらせてもらっぜ。行くぞ！オマエら！！」

フェイは自らの部下を率いて出て行った。

アンリ・オットー

『虹の北斗七星・第7格』

「相変わらず協調性のない人ですね、フェイは・・・」

メイ

「アンリはどうするんだ？」

アンリ

「私は自分の部屋で本でも読んでます。」

アンリも自分の部屋へと戻って行った。

メイ

「暇だな・・・」

ベネツツ

「じゃあ、ワシとチェスでもするか？」

メイ

「ちょうど良い、つき合おう。」

メイとベネツツはテーブルを置き、チェスボードを広げた。

ベネツツ

「軍を動かすのはワシの十八番じゃ。メイよ、覚悟するんじゃない。」

メイ

「その言葉、そのままベネツツに返してやろう。」

メイとベネツツはチェスを始める。

コカヴとポーラは、その光景を見て心なしか微笑んでいた。

第2章・3：紅子と青子の誘拐

江古田町　黒羽家

中森青子

「じゃあ快斗！青子買い物に行つて来るね。」

快斗

「1人で大丈夫かよ？」

小泉紅子

「心配しないで黒羽君。私が青子ちゃんを守るから。」

快斗

「頼んだぜ、紅子。」

紅子

「任せて。」

青子と紅子は、買い物へと出かけて行つた。

その帰り道・・・

青子

「たくさん買えたね、紅子ちゃん。」

紅子

「そっね・・・（何か妙な感じがする・・・誰かにつけられてるよ
うな・・・）」

青子

「どうしたの紅子ちゃん？顔怖いよ？」

紅子

「青子ちゃん、走りましょう！私達、誰かに尾行されてる！！」

青子と紅子は走り出そうとしたが、次の瞬間見知らぬ男女に取り囲まれた。

ザザッ！

青子

「な、何なのこの人達・・・」

ベン

「お初にお目にかかる、お嬢さん方。オレはベン・ドゥーズと申す者。早速だがお嬢さん方に用があつてね、我々と来ていただきたい。」

「

紅子

「断る、と言つたら？」

ベン

「力づくで連れて行くまで・・・」

紅子

「青子ちゃん、逃げて！ここは私が！！」

青子

「で、でも・・・」

紅子

「早くしなさい！！」

青子

「う、うん！！」

青子は走り出したが、すぐに足が止まった。

ビタァッ！！

青子

「あ、あれ・・・？足が動かない・・・」

紅子

「ま、まさか！？」

ベン

「そうだ。私の部下には影を操れる者がいてね、その子の動きは封じさせてもらった。そして、君も・・・」

バリバリ！！

紅子

「キャアアア！！」

紅子は倒れ込む。

ベン

「電気でしばらく動けなくさせてもらう。行くぞ、オマエ達。」

ベンとその部下達は紅子と青子を抱えると、その場を後にした・・・

第2章・4：ベンとフェイの襲撃

ベン

「小泉紅子と中森青子は捕らえた・・・さて、どうするか・・・」

ベンの携帯に、ポーラからの連絡が入った。

ベン

「はい、ポーラ様？」

ポーラ『次の命令よ。フェイと共に、新たに2人誘拐してほしいの。』

ベン

「了解。で、その標的は？」

ポーラ『江戸川コナンと、灰原哀よ。あなた達の携帯には発信機がついてるから。』

ベン

「わかりました。」

ベンは発信機を頼りに、フェイの元へと向かった。

ベン

「いた・・・」

フェイ

「何だよ、ベン！」

ベン

「ポーラ様からの命令だ。江戸川コナンと灰原哀を誘拐しろとの事だ。」

フェイ

「ヘイヘイ、わかったよ。オマエら、アジトに戻ってろ。」

ベンとフェイは、コナンと哀を探しに向かった。

その頃何も知らないコナンと哀は、米花町のショッピングモールで買物を楽しんでいた。

一応哀は、イズナから借りた：RINGをいくつか所持している。

コナン

「色々買えたな。」

哀

「コナン君、楽しい？」

コナン

「ああ、新作の小説も買えたし・・・何より、最愛のオマエと来てるからな。」

哀

「ヤダもつ、コナン君つたら・・・」

コナンと哀は数分後、米花公園で休んでいた。

哀

「おいしいね、メロンソーダ。」

コナン

「そうだな。ん・・・？」

哀

「どうしたの、コナン君？」

コナン

「誰か、いる・・・！」

「ホウ、オレ達の気配に気づいたか。さすがは高校生探偵だな。」

コナンと哀の眼前に、ベンとフェイが現れた。

コナン

「誰だ、オマエらは？」

ベン

「お初にお目にかかる。オレは虹の北斗七星第4格のベン・ドゥーズ。」

フェイ

「オレ様は第6格のフェイ・ダークだ！」

ベン

「オレ達の任務は、オマエ達の拉致。一緒に来てもらうぞ？江戸川コナン、灰原哀……」

コナンと哀の運命やいかに！？

第2章・5：コナンと哀の誘拐

コナン

「オレと哀を拉致する、だと？やれるもんならやってみる！！」

フエイ

「あゝ、面倒くせえ・・・ベンよお、指輪解放しちまって良いかよ？」

ベン

「好きにしろ。」

フエイ

「へへへ・・・齒軋れ！鋼鉄爪黒豹テッパルド！！」

フエイは指輪を解放し、鉄の鎧を纏った黒豹の姿に変身した。

コナン

「哀、こちらは任せろ！ファルディーネ！！」

哀

「コナン君・・・あなたは解放しないの？」

ベン

「オマエ如きに解放する必要はない。」

哀

「言ってくれるわね・・・シャボンガトリンガー・質量最大！！」

ドンー！！

哀が放ったシャボンの球が、ベンを押し潰した。

ゴズン！！

哀

「よし、潰れた！！」

ベン

「どこを狙っている？」

哀

「え・・・」

いつの間にか背後に、ベンがいた。

哀

「ウソ・・・」

ベン

「所詮はこの程度だ。」

ベンはそう言うと、手刀で哀を気絶させた。

トス！

哀

「う・・・」

コナン

「哀!?!」

フエイ

「余所見してんなよ!?!」

コナン

「!?!」

フエイ

「ラァ!?!」

フエイはファルディーネを弾き飛ばし、そのままコナンに突っ込ん
で来た。

ドン!!

コナン

「な!?!」

フエイ

「オマエらは所詮ガキなんだよ。」

フエイはコナンのお腹を殴り、彼を気絶させた。

ゴッ!!

コナン

「う・・・」

ドサ！

フエイ

「へへへ、チヨロいもんだぜ。」

ベン

「長居は無用だ。引き上げるぞ。」

ベンとフエイはコナンと哀を抱え、去って行った。

ファルディーネをその場に残して・・・

第3章・1：非情なる平手打ち

コナン

「ん・・・」

哀

「コナン君、コナン君!!」

コナン

「あ、哀・・・」

コナンが目覚めると、哀が心配そうに覗き込んでいた。

哀

「良かったあ、目が覚めたわ!」

コナン

「哀、ここは?」

「見ての通り、どこかの部屋の中よ。」

コナンが振り返ると、紅子と青子がいた。

コナン

「青子さん、紅子さん!」

紅子

「私達もあなた達と同じよ。ベンってヤツに捕まったの。」

コナン

「ボクと哀の時は、フェイってヤツもいましたよ。」

青子

「まだ何人かいるって事だね・・・」

コナン

「困ったな・・・刃ちゃん達にこの状況を知らせたいんだが・・・」

哀

「幸い今は拘束されてないみたいだし、何とかして連絡取れないかしら？」

青子

「あ！あそこに窓が見えるよ！」

コナン

「窓の外は？」

紅子が窓に行き、下を覗き込む。

紅子

「ここから外に出られそうよ。」

コナン

「じゃあ、ボクが行って来るよ。」

紅子

「じゃあ、私の背中に。」

コナンは紅子の背中に乗り、窓から体を乗り出した。

トン！

コナン

「よし、このまま・・・」

「何をしている？」

コナン

「・・・え？」

コナンが振り向くと、そこにはメイ・ラクレスが立っていた。

メイ

「オマエ・・・部屋から逃げ出したな？」

コナン

「う・・・」

コナンを連れて来たメイは、ドアを開けた。

ガチャ！

哀

「コナン君・・・」

メイ

「フン・・・」

メイはコナンの頬を叩いた。

パァン！

コナン

「うつー!!」

ドサツ！

哀

「コナン君!!」

紅子

「何て事するの!!」

青子

「子供を殴るなんて最低だよ!!」

メイ

「黙れ。」

メイは背中に背負っていた槍のような武器を取ると、目の前のコナン達に突きつけた。

ジャキ!!

メイ

「今度妙なマネをしてみろ・・・殺すぞ？」

メイはそう言うと、コナンと哀、紅子と青子をそれぞれ背中合わせにしてからロープで手足と体を縛り上げる。

ギュツ、ギュツ！

その後、ガムテープを取り出してコナン達の口に貼りつけた。

ペタツ！

コナン・哀・紅子・青子

「んゝ、んゝ！！」

第3章・2：リアンと烈火、因縁の再会

刃はユリと共に、コナンと哀を探していた。

いつまで経っても帰って来ないからだ。

刃

「2人共どこ行つとるんや。」

ユリ

「携帯やバッジに連絡しても応答しないし・・・まさかとは思うけど、リアン・・・」

刃

「アタシも考えとったわ。『虹の北斗七星』・・・連中は7つのビッグジュエルを探しとって言うてたな。そやからいうてそれがすぐ2人につながるやろうか？」

ユリ

「私もそこが疑問なのよね・・・」

その時、巨大な爆弾が飛んできた。

ゴォッ!!

ユリ

「何!？」

刃

「マ・リシルドー!!」

リアンは雷の盾で爆弾を防いだ。

ドゴォ!!

刃

「この攻撃・・・まさか・・・」

「気づいとしたか。さすがリアンやなあ。」

十字架に体を磔にした、カボチャの仮面をつけた者が立っていた。

ザッ!

刃

「やっぱり烈火!!アンタ生きとったんか・・・」

久遠寺烈火

「言ったやろ?ウチがアンタを殺したいと思ってる限り、ウチは死なんのや。」

刃

「悪いけどな、今はアンタに構ってるヒマはないんや。」

烈火

「ヒュヒュヒュ、その顔は誰かを探しとる顔やな。もしかして、コイツらか?」

烈火は刃に1枚の写真を投げつけた。

パシッ！

刃

「写真？こんなんが何やねん・・・あ！！」

刃はその写真を見て青ざめた。

そこには、手足と体を縛られ口を塞がれたコナン・哀・青子・紅子が写っていたからだ。

刃

「何で・・・まさか、アンタが！？」

烈火

「悪いけど、ウチはその子らの誘拐には関わってへんよ。ウチを雇うてくれはった人らに、ウチの知り合いに写真を渡すよう命じられただけや。」

刃

「それって、ポーラとコカヴの事か？」

烈火

「知つとったか。教えといたる。後3時間くらいしたら、連絡くると思うで。」

そう言っと、烈火は風に包まれて消えた。

第3章 - 3 : 新たな2人の幹部格

『虹の北斗七星』アジト

ポーラ

「みんな、集まった？」

ベン

「いえ、ミイがまだ・・・」

ポーラ

「またあの子か・・・」

ベネツツ

「心配なかるう。今頃『彼』が起こしとるわい。」

ミイ・ルーザと????????の部屋

ミイ

「スー、スー・・・」

ミイは呑気に寝ている。

バシッ！！

ミイ

「イタアッ！！」

「オッス、ミイ！よく眠れたか？」

ミイ

「こんな叩き起こし方して何言ってるのよ、ルコア！！」

ルコア・リユース

『虹の北斗七星 構成員』

「悪い悪い！そっいえば、ポーラ様とコカヴ様が呼んでたよ？会議だつてさ。」

ミイ

「な！？それを先に言いなさいよ！！」

ミイは急いで着替えると、部屋を飛び出して行った。

会議の間

バン！！

ミイ

「遅れました！！」

メイ

「遅いぞ、ミイ！どれだけ待たされたと・・・」

メグ

「しょうがないわ、そこもミィのカワイイところよ。」

ベン

「席に着け。」

ミィは自分の席に着席する。

コカヴ

「全員席に着いたようだな。ではこれから会議を始める。」

ポーラ

「今日は新しい仲間を2人紹介するわ。って言っても、1人はみんなも知ってる子だけどね。入って来て！」

ポーラが叫ぶと、筒状の仮面をかぶった者と烈火が入って来た。

メイ

「ム？アイツはルーアスーラではないか？」

コカヴ

「そうだ。ルーアスーラはこのたび幹部格に格上げとなったんだ。」

メグ

「ヘエ、おめでとう！」

ミィ達は拍手する。

ルーアスーラ・ゲルハイリ

『虹の北斗七星 第8格』

「ありがたき、幸せ・・・」

ポーラ

「もう1人は、あのペンデュラムアッドの生き残り・・・烈火ちゃんよ。」

久遠寺烈火

『虹の北斗七星 第9格』

「久遠寺烈火や。以後よろしゅうなあ。」

こうして、烈火は虹の北斗七星の幹部達に迎え入れられたのだった。

第3章 - 4：烈火と8人の幹部格達

ポーラ

「じゃあまあ、お互いに自己紹介しましょうか。」

ミイ

「アタシは第1格、ミイ・ルーザよ。従えている部下・・・かしら？はルコア・リ्यूイットだけ。」

ベネッツ

「ワシは第2格、ベネッツ・ナツシュボーン。これでも若い頃は軍人の経験がある。従えておる部下は7人じゃ。」

メイ

「私は第3格、メイ・ラクレス・・・従えている部下は3人、女性ばかりだ。」

ベン

「オレは第4格のベン・ドウズ。みんなのまとめ役だ。従えている部下は8人。」

メグ

「アタシは第5格、メグ・レーズン！従えている部下は4人よ。」

フェイ

「オレは第6格、フェイ・ダーク！従えている部下は6人だ！！」

アンリ

「私は第7格、アンリ・オットー。部下の数は2人です。」

ルーアスーラ

「私は下級構成員からここまで登り積めた、ルーアスーラ・ゲルハイリ……」

烈火

「アタシはペンデュラムアッドで25人のナイトの1人だった久遠寺烈火！得意分野は雷系や。」

ポーラ

「よろしく、烈火ちゃん。アタシは元FBIの1人、ポーラ・リイズ。コカヴの姉よ。」

コカヴ

「そしてオレが虹の北斗七星を率いるボス、コカヴだ。久遠寺烈火よ、みんなと仲良くやってくれ。」

烈火

「はいはい。」

コカヴ

「それじゃあ、姉さん。そろそろ連絡入れるか？」

ポーラ

「そうね、彼らも待ちくたびれてるでしょうから。」

それから1時間後……

阿笠邸

ユリ

「ただいま。う！」

居間に入ったユリは、暗い空気を感じた。

刃

「何やねんこの空気・・・」

暁

「みんな緊張してるんですよ。」

風月

「何せ、『あの2人』をさらった連中だからね・・・」

刃達はしばらく、連絡を待っていた。

程なくして、電話が鳴る。

ピリリ、ピリリ・・・

ユリは受話器を取った。

ユリ

「はい、もしもし・・・」

ポーラ

「アタシ達は『虹の北斗七星』・・・わかってる？」

ユリ

「・・・はい。」

マリア

「ユリちゃん、貸しい!!」

マリアはユリから受話器を引つたくる。

マリア

「コラア、ゴチャゴチャ自己紹介してんとサッサと用件言い!!こつちは逃げも隠れもせえへんで!!」

ポーラ

「!!!!うるさい子ね・・・まあ良いわ。単刀直入に言うわよ・・・」

「

次回、窃盗団からの脅迫・・・

第3章・5：刃達の強き誓い

ポーラ

「目的を今から話すわ。アタシ達の目的はズバリ、7つのビッグジュエルを手に入れる事。あなた達には、その手伝いをしてほしいの。」

マリア

「こと・・・」

ポーラ

「あら、断るのは無理よ？こつちには人質が4人もいるんだからね。」

マリア

「卑怯者！！」

ポーラ

「何とでも言いなさい。期限は2週間後。2週間後に7つの宝石を手に入れて、指定する場所に持って来なさい。指定の場所は後日改めて連絡するわ。」

ガチャ！

マリア

「クソッ・・・」

刃

「ユーリ兄、そろそろ教えてくれへん？7つの宝石の名前と、その

効果を・・・」

ユリ

「ああ。7つの宝石の名前はそれぞれ、『レッドアトラス』『ブルバンパー』『ブラックキース』『ホワイトクリア』『グリーンゴース』『イエロービート』『ピンクミリウス』という。そしてこの7つの宝石がそろった時、幻の宝石『レインボーマーク』が現れると、古から伝えられているんだ。」

ジヨディ

「レインボーマークを手にした者は、どんな願いも叶うと言われているわ。恐らく虹の北斗七星の狙いはそれね。」

風月

「どんな願いも・・・」

歩美

「アイツらが手にしたら、どんな事になるかわからないわ！」

刃

「アタシはそれを阻止するわ。そのためには、みんなの協力が必要や・・・アタシに協力してくれるか？」

たくま

「もちろんだぜー!!」

元太

「困った時はお互い様だろ？」

ユリ

「刃、安心して。私達があなたを全力でサポートするわ。」

刃

「おおきにな、みんな・・・」

ユーリ

「そういう事なら、オレ達FBIも協力しないワケにはいかないな。ディティクティブマスター達に連絡しておくよ。」

ジヨディ

「立場はお互い互角。ここから先は私達の力量次第ね・・・」

刃達は、宝石の入手並びにコナン達4人の救出を強く決意したのだ。
った。

第4章・1：フェイの危険なる思想

『虹の北斗七星』のアジト

コカヴ

「姉さん。アイツらちゃんと集められるだろうか？」

ポーラ

「大丈夫よ。『あの子達』がいる以上はね。で、例の件だけど・・・

」

コカヴ

「ああ、それぞれの幹部の部下から代表者に出席してもらって説明はした。今はそれぞれの部屋で待機しているとな。」

ポーラ

「そう、それなら良いわ。スムーズに宝石を集めてもらうためには、邪魔をしない方が良い。」

コカヴ

「（ただ・・・『ヤツ』の部下は話をあまり聞かん。厄介な事をしなければ良いが・・・）」

『第6格フェイ・ダークと部下達の部屋』

フェイ

「出席してきた会議はどうだったよ、セイロン。」

セイロン・デューファン

『虹の北斗七星構成員 フェイ・ダークの部下』

「はい、今は各々部屋で待機しているとの事です。」

フェイ

「ぬりいな。ソイツらに宝石を普通に探させて良いのか？」

セイロン

「同感だな。いずれにせよヤツらは敵だ。そのままにしておく価値などない。」

フェイ

「ああ、そうだ・・・オマエら、明後日までに準備を整えとけ。京都にヤツらの仲間がいるって情報をつかんだ。」

セイロン

「では・・・」

フェイ

「ああ・・・ソイツら全員残らず、皆殺しだ!!」

セイロン

「ハッ!!」

セイロン達は各々の部屋に戻って行った。

フェイ

「ヘッ、この間の戦いは少々物足りなかったからなあ・・・たっぷりと楽しませてもらうぜ・・・」

虹の北斗七星幹部の中でも、一際好戦的なフェイ・ダーク。

彼は京都に目をつけ、明後日に部下を率いて襲撃する計画を立て始めた・・・

危険な予感・・・

第4章・2：フェイとセイロン達の出会い

フェイとその部下は、広間に集まっていた。

フェイ

「これから京都に向かうぜ。準備はできてるな？セイロン！」

セイロン

「もちろんです。」

フェイ

「グラナド！」

グラナド・ギオネス

『虹の北斗七星構成員 フェイ・ダークの部下』

「あたぼーよ！」

フェイ

「ダキーム！」

ダキーム・バルンジーナ

「・・・はい。」

フェイ

「ニールボルト！」

ニールボルト・ブリッツ

「血が騒ぐぜ！」

フェイ

「ギイ・ロイ！」

ギイ・ロイ・ランカー

「へへッ・・・」

フェイ

「よし、出かけるぜ！」

「どこに行くの？」

フェイ

「!？」

フェイが振り返ると、そこにはメグ・レーズンが立っていた。

フェイ

「何だ、メグかよ。イヤ、ちっと部下共と遊びにな・・・」

メグ

「あなたいつもこの子達と一緒にいるわよね。」

フェイ

「当然だ！何せ・・・『この姿になる』前からの同志だからな。」

フェイは過去を思い出していた。

フェイ・ダークがまだ、完全な人間でなかった頃・・・

彼は黒豹の魔獣と人間の女の間に生まれた半魔獣だった。

彼はアフリカの大地で、両親と共に暮らしていた。

彼は昔からよく一人で狩りに出かけていたという。

ある時いつものように狩りに出かけていたフェイは、5人の半魔獣に囲まれていた。

「・・・」

ギイ・ロイ

「オレはこんな半端な姿はイヤなんだ。他の魔獣を喰って、さらに力を高める。オレ達に見つかったのがオマエの不運だったな！おとなしくオレ達の・・・血肉になれや！！」

ギイ・ロイは自慢の長い舌で攻撃する。

黒豹の半魔獣は華麗に避けると、ギイ・ロイの舌を噛みちぎった。

ブチィ！！

ギイ・ロイ

「・・・強いな。」

セイロン

「名は何と言う、半魔獣。」

フエイ

「フエイ・ダーク・・・それがオレの名前だ。」

グラナド

「良い名前だな。」

ニールボルト

「オレ達を束ねるに相応しい・・・」

フエイ

「あ？」

セイロン

「我らはあなたと同じく、人間と魔獣の間に生まれた半魔獣。だが我ら、このまま半魔獣などで終わる気はない。いつか魔獣レベルまで進化する事が望みだ。そのためには、我らを束ねる王が必要・・・差し支えねば、我らをあなたの同志にさせていただきたく。」

フエイ

「ヘッ、面白えヤツらだ。良いだろ、同志にしてやらあ。」

これが、虹の北斗七星第6格フエイ・ダークとセイロン・デューフアン達の最初の出会いであった・・・

第4章・3：山王学園への侵入者

京都 山王学園

美保達は、山王学園の生徒会室に集まっていた。

美保

「ええ、わかったわ。こつちも準備しとく。リアンちゃん達も気をつけてね。」

ガチャ！

金美

「リアンちゃん、何て？」

美保

「新一君と志保ちゃんが誘拐され、人質にされちゃったそうよ。交換条件は、7つの宝石を集める事らしいわ。」

銀一

「7つの宝石って、昔母さん達が探そうとしてたヤツか？」

美保

「恐らくね。7つの宝石を悪用されたら大変な事になるわ。リアンちゃん達に協力しなきゃ。」

その時・・・

ドゴォン！！

エル

「な、何今の音!？」

深雪

「校庭の方から聞こえたわ!」

美保は窓から顔を出す。

すると、5人の男達が校庭に立っていた。

美保

「アイツらが、リアンちゃんの言っていた・・・?」

銀一

「多分そうだよ!美保、どうしよう!？」

美保

「慌てないで。泉ちゃん、波香ちゃん、祐美ちゃん、伊澄、弥生、金美!あなた達は学校にいる生徒達を手分けして避難させて!!」

泉・波香・祐美・伊澄・弥生・金美

「了解!!」

泉達は走り出した。

美保

「残ったみんなは、私と一緒に侵入者の撃退よ!!」

セイロン

「生徒達が慌ただしいな。」

グラナド

「面倒だ！サツサと潰しちまおうぜ？」

「そうはさせない！！」

セイロン達が声のした方を向くと、美保達が立っていた。

美保

「あなた達ね、侵入者は。何の目的でここに来たのかは知らないけど、学園の平和を乱すヤツらは許さないわ！みんな、散って！！」

銀一達は、四方八方に散った。

セイロン

「では、我々も・・・」

セイロンとダキームは深雪と弓雁、グラナドは銀一、ニールボルトは美香をそれぞれ追って行った。

そして残ったギイ・ロイは美保・エルと対峙する事になる。

次回、全面対決！！

第4章 - 4 : 強大なる刺客!! 1

セイロン・デューファン&ダキム・バルンジーナVS天幕深雪&月島弓雁

セイロン

「お初にお目にかかります、お嬢さん方。私はセイロン・デューファンと申す者・・・察しの通り、虹の北斗七星の構成員です。向こうの彼はダキム・バルンジーナと言います。」

弓雁

「コイツさつきから睨んでくるだけや・・・一言もしやべらんのは逆に気持ち悪いな。」

セイロン

「ああ・・・彼は口数が少ないですよ。」

弓雁

「まあええわ。アンタらに容赦する必要もあらへん。一気に畳み掛けんで、深雪!!」

深雪

「わかってる!!」

弓雁

「食い破れ! 月輪犬熊将!!」
アルテミス

深雪

「咲き乱れよ! 怪美兔葉花!!」
ラフレシア

弓雁と深雪は戦闘形態に変身する。

弓雁

「ウチの一撃、凌げるもんなら凌いでみい!!」

弓雁は大剣を振るいダキームに突っ込んだ。

ドンッ!!

弓雁

「オリヤアッ!!」

ガキーン!!

弓雁

「なっ!?!」

ダキーム

「・・・弱いな。」

その声と同時に、弓雁は腹に鉄拳を受け吹き飛ばされる。

ドスッ!!

弓雁

「キヤアアアア!!」

深雪

「弓雁!!弓雁の大剣が通じない!?!」

セイロン

「そうそう、言い忘れていました。ダキームの体はダイヤモンドより硬いのです。並の攻撃ではキズ1つつきませんよ。」

弓雁

「何やと!?!」

セイロン

「それとあなた方は大きな思い違いをしています。私達はただの人間ではありません。」

深雪

「どういう意味?」

セイロン

「私達は半魔獣と言いましてね、人間と魔獣の間に生まれた人間なのです。故に身体能力は一般人より遙かに上・・・生身の人間であるあなた方に、勝ち目はありませんよ。」

深雪・弓雁

「クッ・・・」

グラナド・ギオネスVS瀬藤銀一

グラナド

「オラアッ!!」

銀一

「わわっ！」

グラナドの連続攻撃を、銀一は何とかかわしていた。

グラナド

「思ったより素早いじゃねえか。女みたいなカワイイ顔してなのに身体能力は高いんだな？」

銀一

「お、女顔って失礼な！！」

グラナド

「だが、逃げてるだけじゃダメだぜえ！！」

ドズン！！

グラナドは両拳を叩きつけ地面を揺らす。

銀一

「うわっ！！」

銀一はコケた。

グラナド

「じっくりカワイがってやるよ。」

銀一

「（美保・・・助けてー！！）」

予想外の強さに大苦戦！

次回はニールボルトとギィ・ロイだ！！

第4章 - 5 : 強大なる刺客!! 2

ニールボルト・ブリッツVS鳳美香

美香

「啄み殺せ！夜闇ヤタガラス鳳骸鳥！！」

美香は戦闘形態に変身し、ニールボルトに突っ込んだ。

ドンッ！！

ニールボルト

「ハハハハハハハハハハ！！」

ニールボルトは電撃を込めた拳で美香を弾き返す。

ゴッ！！

美香

「クソッ！何なのコイツ・・・ただの人間じゃないの！？」

ニールボルト

「そうさ、デイトイクティブマスターの嬢ちゃんよ！オレ達は半魔獣って言うてな！魔獣と人間の間の子なのさ！！」

美香

「半魔獣・・・」

ニールボルト

「そういうこつた。つまりオマエがオレに勝てる可能性は99%ないって事だ!!」

美香

「例えどんな敵でも・・・残り1%の可能性に私は賭ける!それがデイトイクティブマスターよ!!」

ニールボルト

「口だけなら何とでも言えらあ。とりあえずはそのカワイイ体・・・貫いてやんよ!!」

ニールボルトは美香に突っ込む。

ドンッ!!

すると突然、上から誰かがニールボルト目掛けてかかと落としをした。

ゴスッ!!

ニールボルト

「ゴアッ!？」

ニールボルトは地面に叩きつけられる。

美香

「あなたは・・・達治!？」

音切達治

「間に合った・・・金美さんに事態を聞いて駆けつけて来たんだ!」

美香

「あ、ありがと……」

ニールボルト

「テムエ……いきなり出て来てフザケた事してくれんじゃないか？」

達治

「まだ立ち上がるか。半魔獣の名は伊達じゃないんだな。」

ニールボルト

「もう許さねえ……テムエらまとめて叩き潰してやんよ!! 突き破れ! 鋭利角^{エルナドス}猛牛!!」

ドスツ!!

ギイ・ロイ・ランカーVSエル・シーバス&白野美保

美保

「ええ、そうです! 私とエル以外のリミッター解除を早く、ボス!」

美保はジェイムズに電話をかけていた。

ジェイムズ

「わかった、後5分稼いでくれ! 5分あればリミッターも全員分解

除し終わる！」

美保

「了解しました。」

エル

「この人・・・人間と戦ってる感じがしない！まるで野獣と戦ってるみたいだわ・・・」

ギイ・ロイ

「その通り。オレ達は魔獣と人間との間に生まれた半魔獣っていうんだよ！機敏な動きができるのは当然だ！！」

エル

「そういう事・・・なるほど、普通の人間じゃないワケね。ならば気にせず戦えるわ。初の陣・・・雷撃！！」

エルは両拳に雷をまとわせ、ギイ・ロイを殴り飛ばした。

ゴッ！！

ギイ・ロイ

「グアッ！！」

バチバチ・・・

ギイ・ロイ

「・・・強いな。だがオマエはわかってない。オレ達は肉弾戦だけじゃないんだぜ！」

ギイ・ロイは指輪を取り出す。

ギイ・ロイ

「呑み溶かせ・・・人食蝦蟇蛙（フロゲフログ！！）」

ギイ・ロイはカエルのような姿になった。

次回、エルの実力が明かされる・・・

第5章 - 1 : 強大なる刺客!! 3

ギイ・ロイ

「呑み溶かせ・・・人食蝦蟇蛙!!」
フロゲログ

ギイ・ロイはカエルのような姿になった。

ギイ・ロイ

「どうだ、ああ？これがオレの真の姿よ！オレは武器の舌で魔獣を喰い、力を伸ばしてきた！あの日まではな・・・」

美保

「あの日まで？」

ギイ・ロイ

「オレはフエイを喰おうとして逆に舌を食いちぎられた。それ以降、オレの成長は止まったんだよ。他のヤツも成長が止まり、これ以上の進化はできないと悟ったオレ達は、一部の肉体をフエイに捧げたのさ。」

美保

「そんな事を・・・」

ギイ・ロイ

「今はそんな事どうでも良いがな。今のオレが成すべき事は、オマエらを始末する事よ!!」

ギイ・ロイは舌を伸ばしてきた。

ビュッ！

舌がエルを絡め取る。

グルル・・・

エル

「キャッ！！」

美保

「エル！！」

ギイ・ロイ

「1人ずつ喰らってやる。まずはオマエからだ！！」

ギイ・ロイはゆっくりとエルを引き寄せ始めた。

ザザザ・・・

美保

「エル！！！！」

エル

「あなたも哀れなものね。私の技の間合いに踏み込むなんて・・・」

ギイ・ロイ

「あん？」

エル

「私の2番目の術はね、相手に近づかないと発動できないのよ。で

もあなたが迂闊にも私を引き寄せてくれたおかげで、それが使える
ってワケ。」

ギイ・ロイ

「ハッ、それがどうしたあ？そんな事する前に喰らっちまえば良い
だけの話だ！」

エル

「残念ね。もうその陣はあなたの足元よ？」

ギイ・ロイ

「な、何だと!?!」

エル

「次の陣・・・サカサヒライシン逆避雷針!!」

エルが術を唱えると、ギイ・ロイの足元から雷が上がり、ギイ・ロ
イを焼き尽くした。

バリバリバリ!!

ギイ・ロイ

「ギャアアアア!!」

ドサッ!

エル

「フウ。」

シュルル・・・

美保

「エル、やるじゃない！で、この人は？」

エル

「あゝ、ダメね。完全に死んでるわ。誰に命令されて私達を襲撃したのか聞き出したかったのに。」

「聞き出す必要はねえぜ？」

エル

「だ、誰！？初のだ……」

「遅えよ。」

ドスッ！！

エル

「カハッ……」

次の瞬間、突如現れたフェイの右手がエルの腹部を貫いていた……

次回、銀一が本気に！？

第5章・2：銀一の覚醒

銀一

「アンタ、虹の北斗七星の一員なんだろう？名を名乗らないのか？」

グラナド

「オレはグラナド。フェイ・ダークの部下の1人。まあオレは、あんまり人を殺めたくないんだがな。」

銀一

「ふうん・・・アンタとは気が合いそうだ・・・な!!」

銀一は手裏剣を放った。

シュツ!!

グラナド

「おおっと！オマエ、くノ一か・・・」

銀一

「オレは女じゃねえ!!」

グラナド

「じゃあ、男の娘か？」

銀一

「バカにしてんのかオマエ・・・」

グラナド

「冗談だよ。だがオマエ、随分と余裕だな。」

銀一

「当たり前だよ。オレは絶対、負けないからね。」

グラナド

「なるほど、随分な自信だな。だが・・・」

グラナドはズボンから指輪を取り出す。

グラナド

「これを見てもその自信を保てるか!？」

スッ!

グラナド

「憤怒せよ・・・灼熱砲炎獣!!」
フーバーン

グラナドは全身に炎をまとい、両手に砲台を装備した怪物に変身した。

ドズン!!

銀一

「まるでポケモンのフーバーンそのものだ・・・」

グラナド

「そうだろそうだろ。だがこの姿は成長が止まった姿なのさ。」

銀一

「どういう事だ？」

グラナド

「オレ達は半魔獣でな。完璧な魔獣になるべく、同族の魔獣を大量に喰らって生きてきたんだ。だが、オレ達の成長は止まっちゃった。これ以上進化できなくなっただよ。だからオレ達は、上司であるダークに肉体の一部を捧げた。ま、無駄話はこちらまでにするか。どの道オマエじゃ、オレは倒せねえからな。」

銀一

「何だと・・・？」

グラナド

「オマエの事は調べがついてんだ。瀬藤銀一。京都府警刑事部長瀬藤愛子の息子で、京都を担当するディティクティブマスターだとな。」

「

銀一

「そうだけど・・・」

グラナド

「オマエは特別なディティクティブマスターで、姉と2人1組でやつているらしいな？それはつまり、『2人の時しか指輪を使えない』という事だ。今オマエは1人・・・丸腰も同然・・・いたぶるのは楽勝って事だ！！」

グラナドは両手の砲台から火炎弾を放った。

ドン！！

ババツ！

銀一

「グラナド、アンタは1つ勘違いしてるぜ？」

グラナド

「勘違いだと？」

銀一

「確かにオレは2人1組だ。だが、それだけじゃないのさ。オレ達
ディティクティブマスターは、成長すれば『シン』が使えるように
なるんだが・・・オレの場合は『1人でも指輪が使える』状態にな
るんだよ・・・」

グラナド

「何！？」

銀一

「コイツはまだ覚えてたでな、仲間にも見せた事がねえ・・・あり
がたく思えよ？コイツを見せるのは・・・アンタが最初だ！！」

スッ！

銀一

「なび靡け・・・シルヒアウロボロス白銀風銀龍！！」

第5章・3：銀一の『シン』の力

銀一は銀色の羽衣をまとったような姿に変わっていた。

グラナド

「なるほど、それがオマエの真の力が・・・」

銀一

「そうだよ。最も・・・この姿をアンタが見るのは、これで最後になるけどな。」

グラナド

「どういう意味だ？」

銀一

「こういう・・・事だ!!」

ドンッ!!

グラナド

「は、速っ・・・」

銀一

「風・激脚!!」

銀一は強烈な回し蹴りをグラナドに放った。

ゴッ!!

グラナド

「グオオオオオ!!」

ザザザ・・・

グラナド

「な、何だこの火力は・・・!?」

銀一

「オレの真は、自身の身体能力を3倍にする。元々忍者であるオレの場合、その身体能力はバカにならない。」

グラナド

「なるほど・・・どうやら、オレの本気を見せねばならんようだな・・・」

銀一

「（ヤツの雰囲気が変わった?）」

グラナド

「オレは炎を自在に操る半魔獣でね・・・限界まで力をためれば、この辺り一面を一瞬で蒸発させられる程の熱気を放てるのさ・・・だがこの技を1度放てばオレは丸1日動けねえ。まさに諸刃の剣だ・・・どうだ瀬藤銀一。ここまでオレの力の事を話しても、臆せず立ち向かえるか?」

銀一

「愚問だな。オレはただ、与えられた仕事をやるまでだ。オマエを倒し、逮捕さる。それが今のオレの任務だ・・・」

グラナド

「言うじゃねえか。なら、オレの限界の一撃を受け止めてみせろ！
！ブーバーン・オーバーヒート！！」

ゴッ！！

銀一

「シン・ウロボロス・シルビアディヴァルガ・・・」

銀一は巨大な銀色の羽衣をまとった女神に変わり、グラナドを押し潰した。

ズドオン！！

グラナド

「たいしたヤツだ・・・自分の体で、オレの限界の一撃を受けきる
とはな・・・アンタの名前、聞いたって良かったぜ・・・」

ドサッ。

ガチャン！

銀一

「拘束完了。さて、他のみんなは大丈夫かな・・・」

達治

「ガッ・・・！！」

美香

「達治い!!」

美香は達治に駆け寄る。

美香

「達治!!大丈夫!?!」

達治

「だ・・・大丈夫だ・・・余り深くは刺さってない・・・防御用の鎧をまとって来たからな・・・しかし、コイツの変身・・・まるで猛牛だな・・・」

ニールボルト

「お誉めに預かり、光栄だよ・・・だが、悠長に話しているヒマはない・・・オマエ達は我々の目的の障害だ・・・ここで始末させてもらうぞ・・・」

ズズズズズ・・・

美香

「角が、伸びた・・・あなたの術は、自在に角が伸びるのか・・・」

ニールボルト

「フツ、その通り・・・早速だが、オマエのその華奢な体・・・貫かせてもらおう!!」

ドンッ!!

第5章 - 4：美香達の限定解除

ニールボルト

「さて・・・ゲームセットといこうじゃねえか・・・」

美香

「クッ・・・」

その時、美香の腕にはめられた腕輪が光った。

コオオオオオ・・・

達治

「美香、この光は・・・？」

美香

「間違いないわ・・・限定解除よ！」

ニールボルト

「限定解除だど？」

美香

「そうよ。私達ディティクティブマスターは強大な力を持つから、普段は力を1/3まで抑えてるの。つまりこの限定解除こそが、私達の本気ってワケ。」

ニールボルト

「ほざけー!!」

ニールボルトは突っ込んで来た。

美香

「哀れな子・・・真・春水・闇影骸鳥・・・」

美香は巨大な鳥に変身すると、すれ違い様にニールボルトを斬り裂いた。

ザシュッ！！

ニールボルト

「カハッ・・・」

美香

「安心なさい、峰打ちよ。」

セイロン

「ニールボルト、グラナド、ギイ・ロイが倒されましたか。これは我々も手段を選んではいられませんね。良いでしょう。私の本気の力であなたの相手をしてあげます。噛み砕け、暗黒地牙蠍^{グライオン}！！」

セイロンは空を飛ぶサソリのような姿になった。

深雪

「残念ね。私ももう本気を出せるのよ。真・凜・雪花舞姫・・・」

深雪は頭に花飾りをつけ、ドレスを着た姿になった。

深雪

「氷花弁の・・・舞!!」

深雪は氷でできた葉っぱを体に纏い、セイロンを斬り裂いた。

ザンッ!!

セイロン

「カハッ・・・」

ダキーム

「セイロン!!」

弓雁

「余所見してる場合か？」

ダキーム

「よ、鎧を砕け・・・」

弓雁

「遅いわ。真空・・・波!!」

ドンッ!!

ダキーム

「グハアッ!!」

ダキームはビルの屋上に叩きつけられ、気絶した。

フェイ

「仲間の魔力が途切れた・・・全員やられたってのか・・・!?!」

美保

「エル!!エル!!」

エル

「う・・・」

美保

「よくもエルを!!許さない・・・真・・・」

「そこまでだ!!」

ザッ!

美保

「ユーリさん!?!」

ユーリ

「話はリアンから聞いている。ここは一旦退くんのだ。」

美保

「でも・・・」

ユーリ

「それに、向こうも迎えが来たようだ。」

ベン

「フエイ、何をやっている・・・アジトに帰るぞ。」

フエイ

「ハイハイ、わかったよ・・・」

ベンとフエイは、デイメンション：RINGで消えた。

シュンツ！

ユーリ

「阿笠博士の家に行くぞ。レインボーマークについて、とんでもない事がわかったんだ。」

美保

「わかったわ。」

第5章・5：レインボーマークの真実・1

阿笠邸

美保

「エルは上の部屋に寝かせて来たわ。今はあずみさんについてもらってる。」

ユーリ

「ある程度は揃ったな。じゃあ、レインボーマークについてわかった事を話そう。」

ユリ

「え？レインボーマークを手に入れた者は、いかなる願いも叶えられるんじゃない・・・」

ユーリ

「それは表向きの話だ。真相から目を背けさせるための・・・」

風月

「真相？」

ユーリ

「まずは、この話をするに当たって重要になる昔話を語るとしよう。時は江戸時代末期・・・アメリカに1人の女性科学者がいた。彼女の名は、リオン・スターリング。ジョーデイの先祖にあたる。彼女は、魔獣と人間との結婚に関する研究をしていたんだ。」

刃

「魔獣と人間が？」

ユーリ

「今の半獣人の礎となったのが、魔獣と人間の結婚の研究なんだ。彼女は魔獣と人間両方が幸せになれる事だけを考えて、日夜研究に明け暮れていた。そして彼女には、妹弟子がいたんだ。彼女の名は・
・ハウル・リーズ。」

暁

「リーズって、まさか・・・！？」

ユーリ

「そうだ。ハウル・リーズは、ポーラとコカヴの先祖だ。」

真希

「2人に何があつたの？」

ユーリ

「ハウルはリオンと違って、危険な研究ばかりしていた。魔獣同士を合成し凶暴な魔獣を造り、その魔獣を人間と夫婦にする事でより凶暴な魔獣人を造り出す事ばかりを考えていた。そしてある日、ついに彼女は最悪の魔獣人を造り出してしまった。その名も・・・テリダックス。ティラノサウルスの魔獣と、人間の娘との間に生まれた最強の魔獣人だ。」

暁

「テリダックス・・・」

ユーリ

「その後も彼女は、次々と魔獣人を生み出した。コウモリの魔獣人

ヴァンプラー、トビサソリの魔獣人キーロックス、セミの女魔獣人
ゴラスト、そしてスズメバチの魔獣人バイティル・・・彼女はそ
の5人を従えて、アメリカ全土を襲撃し始めた。突然の襲撃に、ア
メリカ人達はただ逃げ惑うしかなかった。」

美香

「何てひどい！」

ユリ

「ハウルは傲慢だったが、リオンが彼女を許さなかった。リオンは
ハウルに対抗するために、3体の魔獣人を生み出した。それがドラ
ゴンの魔獣人ミセリックス、ザリガニの魔獣人アントローズ、カマ
キリの魔獣人クリカだった。」

ユリ

「それで、結果はどうなったの？」

ユリ

「所詮才能があっても、ハウルはリオンの妹弟子・・・実力の差は
明らかだった。ハウルは米警察に逮捕され、地下牢の監獄に投獄さ
れた。そしてテリダックス達5人の魔獣人はミセリックス達3人の
魔獣人達と共に、レインボーマークという虹色の宝石に封印された。
そして彼女はレインボーマークを悪用されなかったために、炎・水・草・
雷・氷・音・竜の7属性の魔力を注ぎ込んでレインボーマークを7
つの宝石に分け、世界各地の秘境に放った・・・」

第6章・1：レインボーマークの真実・2

たくま

「ちよつと待て・・・じゃあ、虹の北斗七星が7つの宝石を狙う真の目的は・・・」

マリア

「先祖が造った、古の魔獣人達の復活・・・ちゅうこつちやな。」

暁

「そついう事だな・・・」

実希

「そやけど、もしその魔獣人達が復活してもうたら・・・」

歩美

「間違いなく、世界は混乱の渦に巻き込まれるわね・・・ジヨディさん、1つ聞いても良い？」

ジヨディ

「何？」

歩美

「ジヨディさんの先祖・・・リオンさんは、何か書き置きとか残してないの？宝石を隠した場所の地図とか・・・」

ジヨディ

「そついえば、私がユーリの所に嫁いだ時、色々家財道具を持って行ったわ・・・両親はいなかったし、前の家に家財道具残してても

仕方ないから・・・」

真希

「じゃあ、その家財道具の中に・・・」

風月

「地図か何かが隠されてる・・・そう見て良いかもね？」

ジョディ

「そうね・・・私の家の家財道具は、かなり前から使ってるのもあるみたいだし・・・」

ユーリ

「じゃ、久しぶりにマンションに帰ってみるか。」

アメリカ ユーリのマンション

ガチャ！

ジョディ

「ここが私の部屋よ。」

刃

「隠されてるとしたら、机の引き出しかな？」

ジョディ

「はい、鍵。」

ユリ

「引き出しに鍵？随分嚴重なのね。」

ガチャン！

ガラッ。

ジヨデイ

「あつたわ、これじゃないかしら？」

ユリ

「『レインボーマークに関する記述』……間違いねえな。」

リラ

「パパ、読んでみて！」

ユリ

「ああ……『我が妹弟子が生み出した魔獣人達は、危険な存在だ・
・このままでは、世界を崩壊させかねない・・そこで私は、魔
獣人達をレインボーマークに封じて7つに分ち、世界の秘境に飛
ばす事にした・・我が子孫よ、この地図を見つけ出した時は、あ
なたが私に変わって宝石を守り抜いてほしい・・ リオン・スタ
ーリング』……地図も同封されてるな。」

『赤き宝石レッドアトラスは、熱き砂漠の城に隠す・・青き宝石
ブルーバンパーは、極寒の地の博物館に・・黒き宝石ブラックキ
ースは、侍の国のある家に預けた・・白き宝石ホワイトクリアは、
芸術の都のシンボルに・・緑の宝石グリーンゴースは、英国の博

物館に・・・黄の宝石イエロービートは、情熱の国の闘技場に・・・
そして桃のピンクミリウスは、我が家に隠した・・・」

ユリ

「おっと、引き出しの奥にあったぞ！桃色に光る宝石だ！！」

コオオオオオ・・・

ユリ

「これが、ピンクミリウス・・・キレイな宝石ね・・・」

風月

「これで1歩前進・・・残るは、6つね・・・」

刃達は、残る6つの宝石を見つけ出せるのか！？

第6章・2：レッドアトラスを探せ

歩美達はコナン達を助け出すために、7つの宝石を探す事になった。

その内ピンクミリウスは、ユーリの家で見つけた。

残る6つの宝石を探すため、歩美達はそれぞれチームを分ける事にした。

歩美

「どついう風にチームを分ける？」

風月

「そうね・・・あまり多すぎると、チームワークが乱れるかもしれないわね。とりあえず、レッドアトラスは私1人で探しに行くわ・・・」

ユリ

「大丈夫なの？」

風月

「大丈夫よ、私はそう簡単には負けないわ。」

暁

「・・・」

某国某所

ポーラ

「フェイよ、勝手な行動をしたようね・・・」

フェイ

「わ、悪かったよ・・・」

コカヴ

「とにかく、オマエはしばらく謹慎だ。良いな。」

フェイ

「ハッ・・・」

メグ

「それで、5人の部下はどうなったワケ？」

メイ

「全員逮捕されたらしい。まあ、自白しないように毒薬を持たせていたから自決しただろうがな。」

ミイ

「参ったねえ、みんな良い子達だったのに・・・」

アンリ

「そういえば、部下から連絡が来ましたよ。レッドアトラスを探しに行った女がいると。」

ポーラ

「フム・・・じゃあルーアスーラ、アンリ。死なない程度にかわいがってあげなさい。」

ルーアスーラ・アンリ

「ハッ・・・」

風月に、魔の手が迫る・・・

第6章・3：風月に迫る刺客

ルースーラ

「それで、アンリよ。どうやって如月風月女史を倒すのだ？」

アンリ

「そうですね。とりあえず、私の部下達に小手調べをしてもらいましょう。シビア、ジェイル！！」

シュパッ！

シビア・マーメイド『虹の北斗七星構成員 アンリの部下』『アンリ様！』

ジェイル・ゲールド『虹の北斗七星構成員 アンリの部下』

「お呼びでございますか？」

アンリ

「シビア、ジェイル、久しぶりの仕事ですよ。この写真の女の子を倒してほしいのです。」

アンリは2人に写真を見せた。

サッ！

シビア

「これが如月風月・・・？」

ジェイル

「まだ子供ではないですか？」

アンリ

「子供だからと油断してはダメですよ。その子は『黒の組織』の元構成員なんですからね。」

シビア

「ヘエ、なかなか戦いがいがありそうじゃない。」

ジェイル

「我々の相手に相応しい・・・」

アンリ

「頼みますよ、シビア、ジェイル。」

シビア・ジェイル

「ハッ!!」

エジプト 灼熱のピラミッド

風月

「あー、やっと着いた。ここってば暑いったらありやしないわ・・・」

風月は地図を広げる。

風月

「地図によると、レッドアトラスがあるのは最奥部みたいね。じゃ、行ってみますか・・・」

風月はピラミッドに入って行った。

ザッ。

風月

「こんな所に潜る場所があるなんて・・・とりあえず潜んなきゃ先に進めないわね。」

風月は湖に潜った。

ザブン！！

風月

「意外に入り組んでいるのね・・・ん？」

風月が後ろを振り向くと、エネルギーの珠のような物が飛んできた。

風月

「レシルド！！」

風月は虹色の盾で珠を防ぐ。

ドオン！！

「ホオ、かわしたか。」

「流石、黒の組織の元構成員ね。」

風月の前に、シビアとジェイルが現れた。

風月

「あなた達、誰？」

シビア

「初めまして、如月風月ちゃん。アタシは虹の北斗七星構成員、シビア・マーメイド。」

ジェイル

「同じく、ジェイル・ゲールドだ。」

風月

「虹の北斗七星・・・！！」

風月は水中で身構えた。

シビア

「やはりできる子みたいね。」

ジェイル

「ああ、マラガの娘というのは確かなようだ。ならば、我々も最初

から全力でいかなばな・・・」

シビアとジェイルは指輪を取り出す。

シビア

「痺れをまけ、シビルドン雷電電気鰻！！」

ジェイル

「浮き沈め、フルンゲル浮遊霊海月！！」

シビアとジェイルは戦闘形態に変身した。

風月

「羽ばたけ！ファイリア虹季美妖精！！」

風月も戦闘形態に変身する。

風月

「水中はあなた達にとって自分のフィールドなんでしょうね。ただ、あまり私を見くびらない方が良くないわよ？」

シビア

「何？」

風月

「サマザケル・スプリイス！！」

風月は右手から電撃を放った。

バリバリバリッ！！

ジェイル

「ぐおっ!!」

シビア

「ジェイル!!」

風月

「余所見してるヒマはないわよ?ブレイズスプラッシュ!!」

風月は水流をシビアに放った。

バッシュ!!

シビア

「キャッ!!」

ボツ!

シビア

「なっ!?!」

風月

「今の技はいわゆる『熱湯』よ。熱くて体力が低下してくでしょ?」

シビア

「クッ・・・」

ジェイル

「シビア、やむを得ん。あの技を使うぞ。」

シビア

「しょうがないわね・・・」

シビア・ジェイル

「融合合体！！ジェルボルトイール！！」

シビアとジェイルは融合し、巨大なウナギの姿になった。

『行くぞ・・・』

風月

「残念だけど、あなた達に私は倒せないわ。シボン・ザ・ビューテ
イ・オブ・ネイチャー！！」

風月は4枚の翼を生やした姿に変身した。

風月

「ハアアアアッ！！」

風月はジェルボルトイールに突進する。

ドゴォ！！

『カ・・・ハッ・・・』

シビアとジェイルは元の姿に戻ると、沈んでいった。

ザパア！！

風月

「フウ、何とか倒せた・・・さて、このまま進めば最奥部ね。」

風月はピラミッドの最奥部にやって来た。

風月

「ここが最奥部・・・さて、レッドアトラスはどこに・・・」

「ここまで来たか、流石だな。」

風月

「誰！？」

風月は辺りを見回す。

「ここだ。」

風月は声のした方を見る。

風月

「ウ・・・ウソ・・・」

風月は声の主を見て、絶句した・・・

果たして、声の主の正体は！？

第6章 - 4 : 風月VS喰魔獣

「よう、風月。大きくなったなあ。」

風月

「お父さん！？・・・なワケないわね、お父さんは物心つく前に死んでるんだもの。あなた何者！？」

ルースーラ

「ハハハ、もう正体を見破ったか。流石は『マルサーラ』だ。オレはルースーラ・ゲルハイリ。『虹の北斗七星』の幹部格だよ。」

風月

「幹部格！？虹の北斗七星の幹部格は7人のハズじゃ？」

ルースーラ

「2人増えたんだよ、オレともう1人な。まあアンタには関係ない話だ。アンタはここで死ぬんだからな！！」

ルースーラは三つ叉の矛を取り出すと、風月に向かって来た。

風月も変身し、応戦する。

風月

「ブレイズウィング！！」

ゴォッ！！

ボッ！！

ルースーラ

「グッ・・・」

風月

「ブリーズ・ショット!!」

風月は凍った翼から氷のトゲを発射し、三つ又の矛を凍らせた。

ビュゴオオオ!!

ピキピキ・・・

風月

「ハアツ!!」

バキッ!!

風月は回し蹴りで矛を破壊する。

ルースーラ

「やるな・・・流石は『如月雪那^{きみづせつな}』の娘。」

風月

「お父さんの事知ってるの!?!」

ルースーラ

「当然だ。なぜなら・・・この姿は如月雪那そのものと言っても過言ではないからだ!!喰らい尽くせ・・・喰^{デスイーター}獣力魔獣!!」

ルースーラは巨大なタコのような姿に変身した。

頭の部分にルースーラがいる。

ルースーラ

「オレは元々、虹の北斗七星でも下級戦士だった。それがなぜ幹部までなれたかわかるか？それは・・・オレが全ての構成員の中で、無限に進化する戦士だからだ！！」

ズオツ！！

ルースーラ

「オレの能力は『喰獣力魔獣』。魔獣を喰らって、その力を我が物とする能力。コイツは如月雪那を喰って帰って来た魔獣を・・・そのまま喰らって手に入れた力だ。そしてオレが今までに喰った魔獣の数は・・・76543匹！！」

ズオオオオオ・・・

ルースーラ

「ここから先の戦いは！！70000を越える魔獣の大軍勢と、1人で戦うに等しいものと思え！！！！」

風月

「・・・」忠告どうも。でもね・・・」

バサアッ！

ザシュッ！！

ル・アスーラ
「グッ!？」

風月
「それでもあなたは私には勝てないわ。」

ル・アスーラ
「な、なぜだ!!この姿は如月雪那そのものなんだぞ!!なのになぜ攻撃を躊躇しない!？」

風月
「私は物心つく前に父を亡くしてんのよ。私は必死に訓練したわ。父のように、母さんを守る人間になろうと・・・あなたが父親の姿をしているから力が出せない?あまり私をナメないでくれる・・・?シボン・ザ・ビューティ・オブ・ネイチャー!。」

バサアッ!

風月は背中に4色の翼を生やした。

風月
「私を子供だと甘く見たわね。シボン・フツキ・フェウノウス・バードレイム!！」

風月は両手を前にかざすと、巨大な虹色の蝶を発射した。

ドンッ!!

風月
「あなたの弱点は、胸のコアね。」

虹色の蝶が、ルースーラの胸にあるコアを貫く。

ドスッ！！

ルースーラ

「カハッ・・・」

風月

「さようなら、忌まわしき魔獣さん。」

ルースーラは大爆発した。

ドゴオオオオ！！

風月

「ハア、ハア・・・流石は虹の北斗七星の幹部格・・・体力使い果たしたわ・・・」

ドサッ！

風月は倒れる。

その彼女の眼前に、アンリが現れた。

ザッ！

アンリ

「ルースーラ、やられましたか・・・自分の力を過信し、鍛錬を怠るからそうなるのです。でも安心しなさい、ルースーラ。君の

不始末は私が拭っておく。」

アンリは刀を振り上げる。

アンリが風月に刀を振り下ろそうとした、その時・・・

ヒュオッ！

バキン！！

アンリ

「なっ！？」

暁

「させるかよ・・・」

アンリの刀を防ぎ折ったのは、暁だった・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1642m/>

名探偵コナン・幻惑の3怪盗(トライシーフ)

2011年10月14日21時52分発行